奈良時代の「如意輪」観音信仰とその造像

――石山寺像を中心に――

井上一稔

はじめに

奈良時代に如意輪観音のうち二臂の姿が信仰されていたとすることは定説となっているようだ。[1] しかし、天平宝字五年（七六一）十一月から造像に着手され、同六年八月に彩色を完了した[2]石山寺の本尊像を考えてみると、既に指摘のあるように、[3]正倉院文書中には「観世菩薩」と記されているのみで、如意輪観音とは記されておらず、石山寺像が果して如意輪観音として造像されたか否かは疑問なのである。ゆえに、奈良時代の如意輪観音信仰の実態についても定説に対する疑問が生じて来る。

石山寺像を最初に「如意輪観音」とするのは、十世紀末の『三宝絵詞』を待たねばならず、この間の事情は直接には判明しない。ただ猪川和子氏の研究から、[4]平安時代も聖宝の頃には如意輪観音と呼ばれていたことが想定され、『三宝絵詞』より約一世紀遡ることができるが、やはり奈良時代の事は不明と言わざるを得ない。[5]

しかし、このテーマに取り組むに当たっては、問題の設定があまりに慎重すぎるのではないかとも思えて来る。史料的には十世紀末からとはいえ、いたるところで〝石山の如意輪観音〟の名はみられるし、[6]如意輪を略して単に「観音」と呼ぶ事も十分に考えられるからである。そこで、改めて問題確認の意味で、次の点に注意したいと思う。

それは、石山寺丈六塑像が良弁の指導下に造像されたことは福山敏男氏の研究からも明らかだが、[7]『石山寺縁起』等が言うように、良弁が如意輪法を行ったかどうかは甚だ疑問だということである。良弁には、正倉院文書中に多くの経典借用に関する文書がみられ、不空羂索観音関係経典なども見られるにも係わらず、如意輪関係経典の名は全く見いだせないのである。この点だけで良弁に如意輪観音信仰が無かったとは言い切れないものの、先の縁起のように如意輪法を修したなどと考えるには大きな疑点であることは確かで、ひいては奈良時代石山寺像が如意輪観音であったか否かの検証の必要性も生まれてこよう。

以下この検証を最初に行い、続いて奈良時代における如意輪観音信仰の実態を探ってゆき、最後に石山寺像を奈良時代の信仰世界の中でもう一度捉え直してみたいと思う。[8]

一、姿と呼称の問題

奈良時代石山寺像が如意輪観音として造像されたかどうかを考えるに際し、最初にその姿を確認することからはじめよう。

現本尊像は平安後期の再興像で、三十三年に一度の開帳とされるが、運よく平成三年は、天皇即位の翌年に行われる吉例開帳（四月十日～同月三十日）に当り、秘仏本尊を拝見することが出来た。その姿を、前回の開帳の時に拝された先学の記述[9]も参照して記しておくと次のようになる。

まず、本堂の厨子に像は納められるが、厨子内は中央に岩組が置かれ、その上に本尊が坐し、左右には執金剛神と蔵王権現と呼ばれる像（少なくとも室町以降の補作）が安置される。ここでは本尊のみに注意して像容を述べると、岩組の上に蓮華座を置き左足を垂下して所謂半跏とする。また、左足の下には、小蓮華座を設けている。この小蓮華座は、現在土に覆われて表面だけを見せている。右手は、第一指と三指を捻じて蓮肉上に如意宝珠を載せる蓮華を持つ。左手は、掌を上にして膝上に置く。近づいて精査した訳ではないのでいま一つ不確実であるが、左足先は後補かとも思われる。また、両手先も表現に少し硬いところが見られ、天衣の先端、蓮肉なども後補の可能性を残すが、即断は出来ない。持物の蓮華、冠繒、宝冠、漆箔などは後補である。

石山寺如意輪観音坐像　挿図1

西大寺如意輪観音坐像　挿図2

表現の印象を少し記しておけば、全体として円満な感があり、面相・体ともにふっくらとして、本像の周りに大きな空間を作っている。下腹部では、柔らかい肉付がなされ、大像にかかわらず細やかな表現がみえる。側面では、肉付けは薄く体の厚みはあまり感じさせない。下から拝するその面相は、全体の穏やかな表現の中にあって、絶対的な力・威厳を感じさせる。

さて、後補の部分も交える現本尊像の姿をもって、奈良時代の本尊の姿をそのまま想定できるであろうか。正倉院文書に見える「礒御座」や、『図像抄』等に二臂で左足垂下して盤石の上に坐すと書かれること[10]、さらには石山寺の旧前立とされる十世紀頃の像（挿図1）も岩座上に左足を垂下して坐すことから、奈良時代の本尊像も、基本的な姿としては現本尊と同じであったとしてよい。しかし、細部について考えてみると、異なっていたと思われる点もでてくる。

まず、その一つとして、台座の形式を考えておこう。現本尊像は岩座上に蓮台をおき、『別尊雑記』の図像[11]（挿図4）等もこの形をとっているが、正倉院文書からすれば、「礒御座」とあるのみで、蓮台があったか疑問である。現存する石山寺像の写しとしては最も古い旧前立像においては、直接岩座に坐しており、蓮台は無い。『久原本図像』[12]も同様である。また、これまで石山寺像を考える上では注意されなかった、西大寺像（挿図2）においても同様であることは、奈良時代の像は、直接岩座上に坐していたと考えるのがよいのではなかろうか。

さて次に考えるべきは、その名称問題とも多分に係わる印相であるが、石山寺旧前立像と西大寺像からは、共に両手先が欠けており推測できないのは残念である。また、先述のように現本尊像も持物は平安時代のものではない。そこで頼りとするのは、十二世紀以降の図像集の類である。図像集による考察は、既に猪川氏によって行われているが、[13] 改めてみておくと、『図像抄』には、『如意輪陀羅尼経』壇法品の形像の引用の次に、[14]

但世多図造像左持蓮花右説法印之像、今石山寺如意輪是也、當于先所引如意輪陀羅尼経所説像

と記している。これによれば、石山寺像は左手に蓮華（経はその上に宝珠を載せると説く）を持ち、右手は説法印であって、きちんと経に基づいているとする（アの記事とする・挿図3）のだが、その次に経に説く二臂像と石山寺像は「頗る相違あり」として異説を左のように述べる。

従昔所造画二臂像、皆右手作施無畏、左手於膝上作与願印、垂下左足坐盤石上、大和国龍蓋寺丈六如意輪像亦同之、東大寺大仏殿左方如意輪亦同之垂下左足、

但石山寺焼亡之時、寺僧拝見之、左手作与願安膝上垂下、右手持蓮花、花上安如意宝珠、其花茎分三枝、一枝未開花、今一枝荷葉也、

挿図3　如意輪観音図
田中本『諸観音図像』

この記事の前半（イの記事とする）では、昔からのこととして、右手施無畏、左手は膝上で与願印とすることを述べている（ここでは別尊雑記の図像をあげる・挿図4）。これより、石山寺像が『如意輪陀羅尼経』に基づく二臂像であるとする先の説を否定するのであるが、またこの説も後半で否定されるのである。

ここで、後半の記事に入る前に、引用文中に出てきた石山寺像と同じ姿とされる龍蓋寺（岡寺）・東大寺大仏殿左方脇侍も、如意輪観音とされることには疑問があることを述べておこう。

東大寺大仏殿脇侍像については、田村寛康氏の詳細な論攷があり、[15] 奈良時代に既に（如意輪）観音・虚空蔵菩薩として造像されたことは明らかである。しかし、田村氏の提出されている史料においても、左脇侍を如意輪とするのは、嘉承元年（一一〇六）の『七大寺日記』のみであり、小野玄妙氏が脇侍の典拠であるとされた『観虚空蔵菩薩経』においても「観音」とあるのみで、如意輪観音を指しているわけではない。[16]

岡寺像については、猪川氏の実査に基づく見解があり、[17] 台座の調査から石山寺と同じく左足垂下の像であったことを証明され、諸種の史料から本像は道鏡によって作られたという伝承を支持されている。しかし、ここでも本像

挿図4　石山寺　如意輪観音図
『別尊雑記』

挿図5　石山寺　如意輪観音図
田中本『諸観音図像』

を如意輪観音であるとする決定的な史料はみられず、後に述べるように道鏡の如意輪観音信仰にもかなり不確実な要素がある。

さて後半（ウの記事とする）では、寺僧が焼亡の時に拝見した姿として、左手与願で膝上に垂下し、右手は宝珠を載せた蓮華を持っていたと記している。この寺僧による記事は、前半の姿に蓮華を持たせれば成立する姿であるが、『久原本図像』・田中本『諸観音図像』[18]（挿図5）や現本尊像とも一致し、実見に基づくことからすると最も信頼がおけそうにも思える。

しかし、この説が奈良時代まで遡れるかというと、否定的にならざるを得ない。それは、宝珠を載せる蓮華という特徴的な持物は経説と同じなのに、その持物を持つ手が、左手に蓮華を持ち、右手は説法印とする経説と異なるからである。この様に、かなり特徴的な持物である宝珠付き蓮華が二臂如意輪の一番の象徴であることからすれば、この左手の持物を右手に持ち変えた姿を作るということは考え難いのである。そして、昔より造られるとし、岡寺や東大寺大仏脇侍の姿をあげて、これを同じ姿だとするイの記事もそれなりに信憑性があると考えてもよいと思われることから、改めてこれらの記事の関係をどの様に考えるのかが問題となって來る。

ここで私は一つの事情を想定してみたい。その事情とは、先にも少し触れたが、イの記事のように奈良時代の像の右手が施無畏印であり、後世この右手に宝珠付蓮華を持たせ如意輪観音としたのではないかと言うことである。

この様に考えれば、イとウの記事の矛盾は解決することになる。つまり、ウの記事の寺僧は、蓮華を加えた後の姿をみたと考えるわけである。そしてまた、アの様な現存像や図像とは異なる、全く実状に合わない記事が作られることも、石山寺像が如意輪観音であるとされてからの、経典上の姿でなければならぬという思い込みによるものであると解釈できる。このように、上記ア・イ・ウの一転、二転、三転する混乱した記述には、本来如意輪観音でなかった像が、ある時期より、如意輪観音であるとされるにいたり、経説との差異を埋めるために払われた努力が現れていると考えるのである[19]―何故如意輪観音とされたのか、又その時期の上限については後に述べる―。

四

本節の最後に、上記の如く奈良時代の石山寺像は如意輪観音と考え難いことを支持する史料として、次の二点に注意して終わりたい。

第一点は、密部変化観音が圧倒的に多数を占めることで有名な『西大寺資財帳』[20]に、如意輪観音像が見いだせないことである。同資財帳には、如意輪経典の名は見えるのであるから（後述）、奈良時代に本経による造像が行われていたとするならば、ここに如意輪観音の名がみられる確率は高いものと思われる。

第二点は、『東大寺要録』[21]に納める「大仏殿西曼荼羅左右銘文」の東縁文に、観自在菩薩について説く箇所で

観自在菩薩者、…布延大慈大悲、或現一十一面、或現千手千眼、乃名観自在、乃名観世音、又称馬頭、又称不空羂索、

と、変化観音の名を挙げるが、やはり如意輪観音の名は無いのである。仮に、大仏の脇侍の一体が如意輪観音であったのならば、ここでも当然その名は記されているべきであろう。

このような史料からして、奈良時代には如意輪観音に対する意識が在ったのかも怪しくなってくるのであり、先の図像的考察の結果を補強するものとなる。奈良時代の如意輪観音に対する意識の究明は次節で行うとして、ここでは、少なくとも石山寺像が正倉院文書に見えるとおりの「観世菩薩」であり、「如意輪観音」とは呼ばれていなかったことを述べておきたい。そして、

この結果は当然、同じ姿であった岡寺・東大寺大仏左脇侍像にも及ぶものであろう。

二、奈良時代の「如意輪」観音信仰　その一

これより、先の石山寺像の考察を踏まえて、当代の如意輪観音信仰をいくつかの方向から探って行くが、ここで本論のタイトルに、「　」を付けた事について説明しておきたい。それは、一般に如意輪観音信仰とみなされているものが、考察の結果、異なった性質を持つと考えるに至ったからである。しかし、今しばらくは、論述の都合から〝如意輪観音信仰〟と表記することとしたい。

さて奈良時代の如意輪観音信仰を探るのに、まず関係経典の受容状態からみておこう。

正倉院文書における写経文書の分析から、密部観音経典は、天平九・十年（七三七・三八）ころに初写が集中しており、この時期までに大半が伝来していたものと考えられている。[22] その中で、大正蔵経二十に集中して納められる、如意輪観音に関する十種の経典の内、[23] どのようなものが含まれるかを示すと、次のようになる。―これらの経典も、しばらくの間は如意輪関係経典と呼ぶことにする。また以下の番号で経名を示すこともある。―

① 如意輪陀羅尼経　菩提流志訳
② 観世音菩薩如意摩尼陀羅尼経　宝思惟訳
③ 観自在菩薩如意心陀羅尼呪経　義浄訳
④ 観世音秘密無障礙如意輪陀羅尼蔵義経　実叉難陀訳
⑤ 観自在如意輪菩薩瑜伽法要　金剛智訳
⑥ 観世音如意輪含薬品

①は、菩提流志の訳で、正倉院文書中「如意輪経一巻」[24]と現れてくるものもこれに当たろう。また、この経の含薬品を独立させたものが⑥で、正倉院文書にしばしばみえる。②は宝思惟の訳、[25] ③は義浄の訳、[26] ④は実叉難陀の訳[27]であるが、④は大正蔵経中のタイトルでは、『観世音菩薩秘密蔵如意輪陀羅尼神呪経』に当たるものである。また④は、正倉院文書中には「観世音菩薩秘密蔵神呪経」という名で多く登場し、「観世音秘密蔵呪経」という名称もみられる。⑤は、金剛智訳経であり、これらの中では唯一、純密経典に属し、六臂像が説かれていることは重要である。

以上の他に、関連する経典としては、天平勝宝五年（七五三）初見の『不空羂索神変真言経』を挙げておかねばならない。本経の巻九及び巻十二には、⑤と同じく六臂像の姿を説くからである。

右の結果より、逆に八世紀までの訳経で、奈良時代に伝来していないものをみておくと、宝思惟訳『観世音菩薩如意摩尼輪陀羅尼念誦法』、不空訳『観自在菩薩如意輪念誦儀軌』、同訳『観自在菩薩如意輪瑜伽』、同訳『七星如意輪密要経』などである。少し特殊な位置にある宝思惟訳についての言及は避けるが、不空訳の『如意輪瑜伽』は先述の金剛智訳経と同内容であり、『七星如意輪密要経』は七星如意輪と呼ばれる如意輪観音の展開した姿の功徳を説くものであるから、奈良時代に於て如意輪観音の基本的内容をもつ経典で伝わっていなかったものは、不空訳の『観自在菩薩如意輪念誦儀軌』のみということになろう。

このように奈良時代には、如意輪関係経典のうち、七～八割が伝来していたことになり、その中には金剛智の純密経典も含まれていたのであったが、この経典受容に関してさらに具体的な様子を示してくれる史料がある。

それは、「種々観世音経并応用色紙注文」なる天平勝宝五年（七五三）二

月二十一日付の文書[28]である。ここには、数ある観音経典のうち主要なもの十九種（この他、有名無実として二種）がみえている。これを速水侑氏[29]は、当時の人がどのような経典を観音経典として理解していたかを明示する史料として位置づけ、同年七月の「十部観世音経目録」の経名総てが含まれること、『西大寺資財帳』記載の十五種の観音経典も含まれることから、この十九種の観音経典は当時の貴族や大寺院の実際の信仰・修法において、重視され使用されていた主要なものを完全に含んでいるとされた。

ここで、十九種観音経典のうちの如意輪観音関係とされるものに注意すると、①を除いて、あとの②～⑥はすべてみられるのである。このように、十九種のうちの五種を如意輪関係とされる経典で占めることは、不空羂索観音・千手観音・十一面観音関係が、それぞれ二～三経であることに対して、異常に高い数字だと言わねばならない。これは左に引用する「十部観世音経目録[30]」の中で、○印をつけた三経が含まれていることをみればより鮮明になってくる。

観世音菩薩受記経　　千手千眼観世音陀羅尼経
○観音如意陀羅尼経　　○観自在菩薩如意心陀羅尼呪経
請観世音経　　不空羂索呪経
十一面観世音神呪経　　観世音経
○観世音菩薩秘密蔵神呪経　　清浄観世音菩薩普賢陀羅尼経

この現象を、先の速水氏の論から解釈すれば、十一面観音・千手観音・不空羂索観音をしのぐほどの信仰が如意輪観音にあったと言うことになるわけであるが、これをそのまま受け取ってよいものであろうか。あまり適当でないことは、次にみる優婆塞貢進解中の如意輪陀羅尼の割合をみても推測がつくのであるが、この説明は後に述べるとして、ここではひとまず、如意輪観音関係とされる経典が多く注目されていた事実だけを記すにとどめよう。

三、奈良時代の「如意輪」観音信仰　その二

次に、奈良時代の如意輪信仰を、個人に関する史料から考察してみよう。まず、優婆塞貢進解に注目したい。優婆塞貢進解は正倉院文書の中に、天平四年から宝亀三年までのものが残され、そのうち天平十七年（七四五）以前のものについては、その人物の修めた学業を記してあり、これを基に様々な分析がなされている[31]。この天平十七年以前の貢進解の中で、如意輪関係の記載を抜き出すと三例になる。

・天平十四年（七四二）十一月十四日
小治田朝臣於比売。「如意輪陀羅尼」が頌にふくまれる。師主は尼宝蔵。
・天平十四年十一月十五日
秦大蔵連喜連。誦呪に「如意陀羅尼」ふくまれる。菩提遷那が貢進。
・天平十五年一月八日
日置部君稲持。誦呪に「如意摩尼陀羅尼」がふくまれる。師主は薬師寺僧平註、貢進者は多治比真人国人。

この三例から指摘できることは、第一に時期が相接したものであること、第二にすべて陀羅尼で読経はないこと[32]、第三に貢進人数四十三人（天平一七年以前）のうちの三人であることである。最後の点に関しては、十一面・千手観音に関係する者が多くみられるのに比して、かなり少ないと言え、天平十七年以前では如意輪陀羅尼はそうは普及していなかったことが分かる。第一の点は、今のところ理由は明かではないが、第二点は、陀羅尼中心という当時の信仰の主流に一致する。ただ、十一面・千手観音関係史料では、読経もわずかながら認められたことからすると、やはり普及率の差が現れていると

みることもできよう。

ここで説明を加えなければならないのは、奈良朝の信仰の主流であるとした、陀羅尼信仰のことである。堀池春峰氏は、[33]陀羅尼信仰史料として、古くは文武天皇三年（六九九）五月の役小角伝に「呪術を以て称せらる」（『続紀』）とあること、養老元年（七一七）四月には「僧尼は仏道に依り神呪を持して」病人を救済するのが本来のあり方であるとする詔が出され、また『僧尼令』の卜相吉凶条には「其依仏法持呪救疾、不在禁限」と記されること、そして『霊異記』や優婆塞貢進解には誦呪が高率でみられる点を押さえられた。氏は、このような史料から、「ダラニ・神呪を誦して病者救済にあたる事は大宝の僧尼令の第三条によって許容され、養老元年の四月の詔にも再確認せられていることを思うと、奈良時代以前からすでに誦呪的密教が僧尼の実践活動の重要な位置を占めていた事が認められるし、又かかる誦呪によって災害・療病の防止快癒を通して、僧尼・優婆塞等と民衆との接触が予想外に高度な比率を示していたと推定」されたのである。

ここで改めて、先の三例の如意輪陀羅尼をみても、堀池氏の指摘は全く当てはまるわけである。しかし、ただ一つ気を付けておかねばならないことは、如意輪陀羅尼については、堀池氏の述べられる陀羅尼を媒介とした民衆との接触はそれほどみられないのではないかということである。それは、先に指摘したように、史料の数からみて、この陀羅尼はそう流行したものではないと考えられるし、さらに『霊異記』において如意輪観音や如意輪陀羅尼に関する説話が全くみえないことからも推定されよう。

以上優婆塞貢進解より、天平十四・十五年においては如意輪陀羅尼が注目されはじめているが、あまり一般化していない状況をみてきた。では、これ以降如意輪陀羅尼信仰はどの様に展開したであろうか。この問題に答えてくれるのが、天平勝宝四～五年（七五二～五三）の年紀をもつ慈訓及び安寛関係史料である。

最初に慈訓に関する史料をみておきたい。慈訓は奈良中～末期の華厳教学の中心的人物で、宮中講師、看病禅師として宮中に重きをなしながら、道鏡の出現により天平宝字七年に失脚した人である。佐久間竜氏は、[34]正倉院文書にみられる経典を通して、慈訓の教学の傾向を推測され、華厳と密部関係のものが多いことに着目された。そして、『続紀』天平勝宝八歳（七五六）五月丁丑条より、良弁・安寛と共に看病禅師の中心人物として活躍していることを考えると、教学内容は現世的呪術的性格の濃いものであったとされたのである。佐久間氏の指摘された慈訓の関係する密部経典の内容をみると、天平勝宝四年五月の「興福寺僧慈訓請経文」[35]では、奉請経十種のうち、虚空蔵菩薩関係四点、千手観音関係一点、如意輪観音関係三点、十一面観音関係一点、普賢菩薩関係一点と、虚空蔵及び如意輪観音関係経典が多いのがわかる。また、天平勝宝七歳二月九日の「外島院一切経散帳」[36]においては、「請留花厳講師所」（華厳講師＝慈訓）として多くの密部経典がみられるが、その中には如意輪関係経典五種（先の①～⑤）すべてを含んでいるのである。

次に僧安寛に関する史料について述べよう。その前に、安寛にはやはり佐久間氏の詳しい研究[37]があり、彼は東大寺の事実上の指導者良弁の弟子で、その下で東大寺の要職を歴任してその発展に寄与し、道鏡政権下においても大律師大禅師となっていること等が明らかにされている。安寛で注意すべきは、左の史料[38]である。

奉請

如意陀羅尼経小巻

右、為大御多末尓　将誦、所請如前

又釈摩界陀羅尼

又花厳経寿命品

天平勝宝五年九月廿三日付沙弥定矜

僧安寛

この史料で、「大御魂のために」と言うのは、堀池氏の指摘されるように[39]太上天皇聖武の快癒の祈りの為と考えるならば、安寛が内道場にいて活躍していたことを示す。そして、そうだとすれば「如意陀羅尼」が病気平癒のために用いられたことを直接示す史料となり、先にみた慈訓においても、安寛と共に看病禅師であったのだから、その教学の傾向からして看病には如意輪陀羅尼を主とする観音陀羅尼が中心として使われたと考えられる[40]。

このように、慈訓・安寛の史料から、如意輪陀羅尼が病気平癒を目的として誦せられていると考えられた訳だが、これは先の堀池氏の指摘[41]のごとく、陀羅尼一般の傾向でもあった。それでは、他の陀羅尼に対して如意輪陀羅尼の特徴といったものはなかったのかと考えてみると、次のような事が浮んでくる。それは、天平十七年以前の優婆塞貢進解の分析では、あまり流行していなかったと判断されたのに、天平勝宝四～五年の慈訓・安寛といった内道場の僧に関連して史料が登場した事は、この頃に天皇周辺を中心として如意輪陀羅尼が受け入れられてきたという現象を示しているのではないかということである。天平勝宝五年六月四日に、伊豆内侍が宣によって神栄の所に如意輪陀羅尼経を奉請していることも[42]、この推定を強めるものであろう[43]。

本節の最後に、皇室と如意輪陀羅尼という関係で、ぜひ触れておかねばならない人物として道鏡がいる。道鏡については、横田健一氏の名著[44]がある。その中で氏は、道鏡が如意輪法を修したとするのが、信憑性に欠ける『七大寺年表』に依ることから、主として次の二点より、道鏡に如意輪法があったことを証明しようとされた。

第一点は、当時の国の態度として、呪術的な修験の為の禅行・苦行を助長する傾向があったという時代背景、第二点目は、正倉院文書中の道鏡に係わる経典が密部に属するものが多いということからであった。つまり、横田氏は、当時の社会的要請からも、道鏡の教学内容からも、彼が如意輪法を修したとみて誤りないと考えられた訳である。

しかし、この横田氏の論証は、素直に受け入れられるであろうか。まず、当時の政府が、禅行等を助長していたとしても、それが道鏡が如意輪法を修したとする事を直接証明するわけではない。必要条件ではあっても、十分条件ではないのであるが、横田氏が十分条件と考えられたのは、先の第二点目であった。彼は、多くの密教経典を要請しているから、密教に関心があり、それで如意輪法を修したとされることは事実であろうとされたのである。だがこの点も、彼の要請している密教経典に全く如意輪関係経典があらわれないのは、逆に彼に如意輪法があったことを疑う結果となるのである。

この他、道鏡の如意輪法は、次の点からも疑わしい。それは、『七大寺年表』の述べるごとく、仮に道鏡が葛木山で如意輪法を修したことが天皇の耳に入り、保良宮に召しだされ、天皇の病を治療したとすると、先述のように、当時の如意輪信仰には病気平癒が最も目立っているのであるから、道鏡も如意輪法を用いて治療にあたったと考えられよう。しかるに、『七大寺年表』ではどの様かというと、如意輪法ではなく、宿曜秘法を修したことになっており、彼が見いだされる原因となった如意輪法がなぜ用いられなかったのかということで、この話はやはり怪しいものとなるのである。

このように、道鏡の如意輪法には疑わしい点が多くなるが、ただ一つ彼の如意輪信仰を想像させる史料として、先にも挙げた『西大寺資財帳』がある。西大寺は、道鏡とは深い関わりのある寺であるから、[45]その資財帳に如意摩尼陀羅尼経・如意心陀羅尼呪経・如意輪陀羅尼経が見えることは、彼の如意輪信仰の可能性を残すものである。[46]

このように、道鏡の如意輪観音にまつわる話の対応には慎重さが要求されるが、仮に道鏡の如意輪信仰を信じたとしても、如意輪法を修したとするような事は考えられず、さきにみたように当時の一般的信仰であった陀羅尼を中心とするものであったと考えるのが穏当であろう。[47]

四、「如意輪」信仰の実態

前節までは、奈良時代に伝来していた数本の如意輪関係経典は、当代の代表的な観音経典を選ぶ際には、かなりの高率で選択されていたが、優婆塞貢進解等よりみた普及率は、そう高いものではなく、天皇の周辺の僧達を中心に受容されていたのではないかと考えた。また、その内容は、当時の一般的状況と同じく、陀羅尼信仰であり、病気治療に主として用いられていたことが推測できた。

さて、このような状況を踏まえて、「　」の意味を述べる時がきたようだ。その契機として如意輪観音の造像ということを考えてみると、如意輪陀羅尼の誦呪と、その造像の関係を探らなければならないことになる。そして、この点は、如意輪関係経典の内容をふりかえることである程度判明してくるものであろう。そこで注目すべきは、二臂の像容を説く唯一の経典である『如意輪陀羅尼経』[48]（菩提流志訳）である。

本経の内容は、既に少し触れたが、再び全体の構成の中で像容はどのように説かれるかに注意してみておこう。構成は、序品第一、破業品第二、誦念法品第三、法印品第四、壇法品第五、佩薬品第六、含薬品第七、眼薬品第八、護摩品第九、嘱累品第十からなり、姿は壇法品に説かれている。そこでは、閑静な所に清浄な壇を築き、それを内・外院に分け、内院の蓮華台上に「如意輪聖観自在菩薩」とそれを囲む八尊を描き、外院には各方向に天部を配することを述べている（挿図6）。

この構成において壇法品は、奈良時代が陀羅尼信仰の中心の時代であった事を考えるとき、あまり重きをなす位置を占めていたとは思われない。これは、各如意輪経典の構成の比較からも言える。同本異訳とされる実叉難陀訳経（④）、義浄訳経（③）、宝思惟訳経（②）には、壇法品に当たるものは無く、最もボリュームの少ない義浄訳を基本として比べると、菩提流志訳（如意輪陀羅尼経）では、序品・破業品が義浄訳本の全内容に当り、実叉難陀訳では第一品、宝思惟訳では前半が相当する。よって、奈良時代の人々の最も目に触れたのは、菩提流志訳においては序品・破業品であったと考えられ、この部分が陀羅尼の効能を説く箇所で、時代が要求している内容でもあったのである。また先にみた「種々観世音経并応用色紙注文」においても、他経とは壇法品を持つことで異なる本経のみが除かれていたこともこれを推測させよう。故に、壇法品は当時の人々にとっては、そう注意すべき箇所ではなく、そこで説かれる二臂の像容もイメージとして定着するような条件は十分には整っていなかったと考えられるのである。

『図像抄』
如意輪曼荼羅図
挿図6

次に改めて、当代の陀羅尼信仰と造像の関係を考えてみると、菩提流志訳の破業品において、陀羅尼誦呪に際して「想観自在、相好円満如日初出、放大光明蓮花上」を「対在目前」して行うことを述べる箇所があり、陀羅尼とイメージの関連が指摘でき興味深い。

それでは、本経のこのような箇所や、他の三経から受ける観音のイメージとして、果して如意輪観音が浮かんでくるであろうか。ここで興味深いのは、菩提流志訳本のなかで、直接的に如意輪観音を意味する用語を用いるのは、壇法品にみえた「如意輪聖観自在菩薩」という一例だけであるということである。他では、すべて「観自在」もしくは「聖観自在」である。これは、他の三経においても同様であり、もう一つの例外として宝思惟訳本の眼薬法を説く箇所に、「摩尼観世音菩薩蓮華清浄名眼薬成就了」という表現がみられるだけなのである。

このように、四本の経典において、如意輪観音らしい名称を用いるのは、わずか二箇所で、それも共に当時の関心の中心的部分を外れた所に出ているということを考えれば、如意輪観音という変化観音が、これらの経典からどれだけ奈良時代の人々に存在をアピールできたかは、頗る疑わしいのである。言い換えれば、奈良時代の人は、これらの経典から、観音菩薩の説く〝如意輪陀羅尼〟を知り得たわけであるが、それを如意輪観音という変化観音に結び付けて考えていたとは思えないのである（壇法品の呼称には、如意輪と聖観自在を足したような感がある。本来ならば「聖如意輪観自在」とあるべきではないか）。

この考えを、さらに具体的に捉えさせてくれる史料がある。少し時代は降り、平安時代に入って安然（八四一～九一五ヵ）の著した『諸阿闍梨真言密教部類総録』[49]がそれだ。本史料の聖観音法に関する経典を列挙した中から、本論にとって重要なものを抜き出してみると、左の三経が挙げられる。

観世音菩薩秘密蔵神呪経一巻　観世音如意摩尼陀羅尼経一巻
観自在如意心陀羅尼呪経一巻

この三経は、これまでは如意輪観音経典として扱ってきたもの（順に先の④②③に当たる）であるが、ここでは聖観音の経典として分類されているのである。ただ『如意輪陀羅尼経』のみが、純密経典とならんで如意輪法に分類されている。この事情は、如意輪陀羅尼経と三経との、先に述べた内容的差異を確認することで理解できてくるように思われる。その差異とは、如意輪陀羅尼経が他経にない法印品や、曼荼羅を説く壇法品があったりすることである。この点より本経は、他経より密教的であるという意味で、聖観音より密教的な如意輪観音に関係づけられることも分かるような気がする。そしてこの中で、如意輪陀羅尼経を決定的に如意輪観音法として位置づけた要因は、壇法品で説かれる「如意輪聖観自在菩薩」が、如意宝珠を持つということが大きかったのではないかと思われる。ここで思い起すべき事は、平安初期の本格的な密教の伝来に伴う不空の『観自在菩薩如意輪瑜伽』[50]に、如意輪観音の象徴（三昧耶形）として如意宝珠が説かれていることである。つまり、如意宝珠＝如意輪観音の関係が確定した段階で、改めて如意輪陀羅尼経の壇法品に注目して、本経が如意輪観音の経に編入されたのではなかったかと考えられるのである。

そして、如意輪陀羅尼経が如意輪法に属すことになると、以後その傾向は他の三経にも及んでゆき、例えば『白宝口抄』[51]や『覚禅抄』[52]の如意輪観音に関する経典を記したところには、義浄訳の『観自在菩薩如意輪心陀羅尼呪経』が含まれるようになっている[53]。

以上のように安然においては、『如意輪陀羅尼経』以外の三経が聖観音の

ものとみなされていたことは、先に観音の名称の使用状況からの考察と矛盾するものではなく、この三経は奈良時代においても如意輪観音ではなく観音（変化観音でない観音という意で用いている）の経典とみなされていたことがより確かさを増すと思われる。そして『如意輪陀羅尼経』も、奈良時代には未だ如意宝珠＝如意輪観音の意識はなかったと考えられるから（この関係は、純密による三昧耶形の意識の登場を待たねばならないだろう）、またその中心部分が先の三経と同内容であることをも考慮して、やはり如意輪観音ではなく聖観音の経典とみなされていた可能性が大であると考えることができよう。

これらの事に関連して述べておかねばならないのは、奈良時代における如意宝珠に対する意識はどの様なものであったかということである。このテーマも、相当広範囲な考察をしなければならない問題であろうが、本稿での留意点としては、奈良時代の如意宝珠に関して、人々がすぐ思い浮かべたであろうものは、当時の代表的護国経典であり、普及率において他経に抜きんでた『金光明最勝王経』の如意宝珠品[54]であったろうということである。この如意宝珠品においては、まさに観自在菩薩が、如意宝珠の陀羅尼を説くわけである。つまり、如意宝珠に関係するのは、変化観音たる如意輪観音ではなく、観音であったわけであり、先の考察を裏付けるものとなろう。

ここまで論じて気が付くことは、第二節で正倉院文書の中に如意輪観音の雑密経典とされるものが十一面や千手観音経典をしのぐ割合でみられる史料があり、これを問題としておいた。右に述べた通り奈良時代には現在如意輪観音経典とされるものでもそうでないものもあった事を考えると、第三節の考察の結果とも矛盾せず、氷解してゆくものであろう。

以上第二節よりここまでの考察から言えることは、如意輪陀羅尼の信仰と如意輪観音の信仰は同じものではないということである。よって前節までの如意輪観音信仰の特徴として抽出したものは、実は如意輪陀羅尼信仰の特徴であったと言い直さなければならない。そして、この陀羅尼は変化観音ではない観音菩薩のものであったのである。

五、婆羅門僧正の如意輪観音

本節では、奈良時代の如意輪観音信仰の唯一の例外とも言うべき事に付いて述べておく。それは、『南天竺波羅門僧正碑并序』[55]にみえる「臨終告諸弟子云…吾生存之日、普為四恩、奉造如意輪菩薩像、而情願更造八大菩薩像、列坐其像、而無常行迫、其事不諧、汝曹不忘疇昔、宜共相助畢功、弟子等奉遵遺旨、備飾八像」という箇所である。

これによると、菩提遷那が四恩のために如意輪菩薩像の造像を果たしたが、更に八大菩薩像を造像して如意輪像と列坐させようという願いは果たせず、終いに死期がきたので、八大菩薩像は弟子に託し、弟子がこれを作ったことが述べられている。

この記事を信じれば、菩提遷那の没する天平宝字四年（七六〇）二月以前に、〝如意輪菩薩像〟が日本で作られていることになる。そして、没後まもなく八大菩薩像が作られたことになる。

それでは、この如意輪像はどの様な姿の像であったかというと、性空の『南天竺波羅門僧正碑註』[56]に解釈するように、『如意輪陀羅尼経』壇法品に「如意輪聖観自在菩薩」のまわりに「東面画円満意願明王、左画白衣観世音母菩薩、北面画大勢至菩薩、左画多羅菩薩、西面画馬頭観世音明王、左画一髻羅刹女、南面画四面観世音明王、左画毘倶胝菩薩」とあるのを八大菩薩に関連させて、如意輪像をここに説く二臂像と考えるのが有力な説として浮か

んでくる。しかし、注意したいのは、壇法品に説く八尊が、この八大菩薩に当るかというと、右にみたようにすべてが菩薩でなく明王と記されるものもあり、遺言中にみえる「列坐」という語感からは（如意輪像を含むかそうでないかは別として）、如意輪像と同格の八体の菩薩像という解釈の方が適当ではないかとも考えられよう。[57] さらに、ここにみえる「如意輪菩薩」という表現は、先にも注意したように『如意輪陀羅尼経』には全く見えないもので、注意すべきは金剛智訳の『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』なる経題中に見えるのである。

また当時の中国では、密教の流行のもとに、六臂如意輪観音が普通であったと思われ、[58] 故に、菩提遷那も如意輪観音に関しては六臂像の意識が強かったものと推察される。そしてこの事は、彼も当然承知していたであろう『不空羂索神変真言経』の二箇所[59]に、六臂の「如意輪観世音菩薩」を説くことを考えても、妥当な見方だと思う。

このように、奈良時代に既に六臂如意輪観音像の存在を想定することも可能になってきたわけであるが、これを奈良時代の全般的な傾向からみれば、唐より来朝した菩提遷那の特殊事情としか言い様のないことは、既に考察した通りである。

六、石山寺観音像の位置　―結びにかえて―

前節までで、本稿の目的とする所はほぼ述べ終わったが、最後に、その成果を踏まえて、石山寺像の造像に良弁が係わっていることから、[60] 良弁の周辺を見直すことによって、本像の奈良時代における位置づけをしておきたい。

良弁に関してまず注意したいのは、東大寺法華堂不空羂索観音像にまつわる諸事情である。かつて、田中豊蔵氏は、[61] 法華堂本尊とその後ろの執金剛神の関係について、『不空羂索神変真言経』巻八に、観音の座下の左右に各々手に金剛杵を執る大頂金剛と執金剛秘密主菩薩を描け、とある事に求めた。そして、同じく良弁が造像した石山寺観音像に二神王が配されていることにも共通の考えを認められた。

法華堂本尊及び石山寺本尊に同じ理由で執金剛神が付くということになると、当然次に考えられるのは、同じく良弁の係わった法華堂・石山寺それぞれの本尊にも共通する何かがあるのではないかということである。そこで田中氏は、両本尊に共通するものは、法華堂本尊の手に持つ宝珠と、石山寺像が二臂如意輪観音とされることから、やはり蓮華上に在ったと考えられる宝珠を想定された。そして、法華堂像が不空羂索観音の儀軌に見えない宝珠をわざわざ持たせていること、石山寺像が二臂の聖観音の姿にやはり宝珠を持たせていることは、両像とも本来は六臂の如意輪観音を造像したかったのだが、未だその姿が伝わっていなかったので、それぞれ不空羂索観音と聖観音に託してあらわしたのだと推測された。

この田中氏の両本尊が共に如意輪観音を意識していたという御考えは、これまで述べたように奈良時代の如意輪観音への意識からは考え難いことである。しかし最近、浅井和春氏[62]より田中説の欠陥を埋める説が提出された。浅井氏は、法華堂本尊が宝珠を持つのは、『金光明最勝王経』の如意宝珠品（観音が如意宝珠陀羅尼を説く）によるとされ、堂内の諸尊が同経によって構成されていると推測できることからもこれを確かめられた。つまり、法華堂像の宝珠は、如意輪観音の力を表そうとしたものではなく、宝珠の威力を観音に付加しようとしたものであると考えられたのである。

この様に法華堂像に関する田中説は浅井説に依って修正を加えられるべきであるが、では石山寺像については如何であろうか。田中説の石山寺像につ

いて修正すべきは、本像は如意輪観音ではないことから、如意輪観音→宝珠の想定は成り立たない点である。しかし、宝珠と石山寺像に関係があったことは、良弁の不空羂索観音像にまで宝珠を持たせる意識を思うとき、それが石山寺像に及んでいないはずはないと考えられよう。そして、法華堂の不空羂索観音が宝珠を持つことよりも、変化観音でない石山寺像と宝珠の関係の方が、観音が如意宝珠の陀羅尼を説く最勝王経に容易く当てはまることも考えられる。さらに正倉院文書から、天平宝字六年二月に東大寺から運ばれた舎利が、石山寺像内に奉納されていることは、宝珠と舎利を同体とする考えのあることを考慮すると、[63] 石山寺像と宝珠の関係を証明するものともなろう。

以上の事から、石山寺像は具体的な宝珠を持つ姿は確定できないにせよ、何らかの形で（舎利奉納であったかもしれない）如意宝珠の力を持つ観音を表現せんとしたものであるといえるであろう。[64] 故に石山寺像も、前節までにおいて考察した信仰背景の中で良弁の考えにより作られたと言える。そしてこの事は、平安初期に伝来した純密の教理によって、如意宝珠の力を代表する観音が、如意輪観音であることが定着した段階で、石山寺像も如意輪観音の中に取り込まれていった原因となったと思われる。

次に、この位置づけを包み込む形で存在している背景として、良弁が属していた華厳世界のなかでの観音という立場にも注意しておかねばならない。この点に関する教理的な面は明確ではないようだが、作例としては大安寺華厳院にあった盧舎那仏・千手・不空羂索観音の三尊が知られている。堀池氏は、[65] この盧舎那仏と観音の関係を審祥によるものと考えられた。審祥は、新羅に留学して華厳を学んだと考えられ、良弁が天平十二年十月に金鐘寺の不空羂索観音像の前で華厳経講説を行った際の講師であり、また良弁と共に義淵を師とした僧であることが判明している。このように審祥は良弁と深い関係にあったことが指摘されているわけであるが、この点から考えて、良弁の観音信仰に審祥の影響があったとみることはそう不自然なことではなかろう。こう考えてくると、石山寺像もこの華厳における観音の一存在としてあったと推定されてくる。

そこでより具体的に華厳における石山寺像の存在を考える上で注目されて来るのは、審祥の新羅留学という経歴から、新羅華厳の初祖である義湘（六二五―七〇二）にまつわる次のような説話である。

『三国遺事』に載せる洛山寺の観音菩薩の話[66]がそれである。義湘は大悲（観音）真身が、海辺の洞窟に住むということを聞いて、斎戒すると龍天八部や東海の龍から水晶念珠や如意宝珠が献ぜられ、ついに観音の真容を見ることができた。そして、観音が座上山頂の双竹の生えたところに仏殿を建立せよと言い、義湘は金堂を作り、塑像を安置した。塑像は、円満で麗しく、あたかも自然に生まれたもののようであった。そして義湘は、その寺を洛山寺と名付け、念珠と如意宝珠を寺において去った。

この話は、時代の降る『三国遺事』に載せるもので、審祥が留学当時にあった話かどうかは慎重でなければならないが、本稿の主題とする石山寺観音像といくつかの共通点のみられることは一応注意できる。その共通点とは、一つは塑像であること、一つは海辺と川辺の違いがあるが、水に近いところに在すること、また一つは如意宝珠にまつわることなどである。

これらの事から想像すれば、石山寺像は、東大寺毘盧舎那仏脇侍、大安寺華厳院三尊の例と合わせて、審祥がもたらした新羅における華厳内での観音信仰を、良弁が受けて造像したと考えられてくる。[67]

以上述べて来たことを、まとめておけば、従来奈良時代の如意輪観音信仰として考えられてきたことは、観音に付属する如意宝珠とその陀羅尼の威力に対する信仰であった。そして、これは、華厳世界内に取り込まれた信仰でもあった訳である。この様な信仰世界の中で、石山寺本尊像は造像されたのであり、その像容からの考察と併せて、造像当初から如意輪観音として作られた訳ではなかったのである。そして、石山寺像が持っていた、宝珠との関係は、後に如意宝珠を象徴とする観音が如意輪観音であると言うことが密教の伝来に依って確立されると、この尊も如意輪観音とされていったのである。

注

(1) 岩波仏教辞典（岩波書店　平成元年）。また、密教辞典（法蔵館　昭和五〇年）・日本美術史事典（平凡社　昭和六二年）の如意輪観音の項にも、二臂像とは明言しないまでも、奈良時代に如意輪観音信仰があったとして二臂像への信仰を匂わせる表現がある。そしてまた、横田健一『道鏡』（注44）では、道鏡が如意輪法を修したとすることなどからも考えられる。

(2) 福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造営」（『日本建築史の研究』所収　初版昭和一八年のち、綜藝舎より昭和五五年に再版）。
また、本尊の造営経過については宇野茂樹「石山寺本尊考」（文化史研究一七昭和四〇年三月）が詳しい。
近年福山氏の業績を踏まえて、さらに造石山寺所関係文書の復原研究を行ったものとして岡藤良敬『日本古代造営史料の復原研究』（法政大学出版局　昭和六〇年）がある。

(3) 福山敏男「石山寺の創立」（『石山寺縁起絵』角川書店　昭和五四年、後『寺院建築の研究　中』中央公論美術出版　昭和五七年所収）

(4) 猪川和子「石山寺本尊観音菩薩像」（美術研究二七二　昭和四五年一一月、後『日本古彫刻史論』講談社　昭和五〇年所収）

(5) 注3の福山論文では、観心寺の如意輪観音によって代表される平安初期の密教系如意輪観音の片膝を立てた姿が半跏形である石山寺像とどこか通ずるところがあると考えられて、尊名が変化したと理由を推測している。これからすれば、福山氏も奈良時代には石山寺像は、如意輪観音ではなかったと考えられているように受け取れる。ただし、福山氏の述べられている理由は、変化の一要素と成っていると考えるが、後に述べるようにもう少し考察が必要である。

(6) 例えば、一二世紀の碩学恵什も『図像抄』に記しているのを始め、多くの図像類に見える。

(7) 福山敏男「石山寺・保良宮と良弁」（南都仏教三一　昭和四八年一二月、後『寺院建築の研究　中』所収・注3）

(8) これらの考察は、従来より問題となっている半跏思惟像の呼称問題を考える上での重要な基礎作業ともなるものであろう。

(9) 昭和三六年四月が恒例の三三年目の開帳にあたり、注2で引用した宇野論文がその時の観察を記している。

(10) 大正蔵経図像部三巻

(11) 同三巻・図像の裏書に「世間以此像号石山様。但実説（＊実運の説）相違也。行此像時可用別印云々／是行此像仏頂軌文歟。件軌文左掌宝、右輿願文／石山本仏頗似之歟。但、左右相違許也。」とみえ、本文中でも述べるように、ここでも混乱がみられる。

(12) 同四巻

(13) 注4、猪川論文

(14) 大正蔵経図像部三巻。経には「菩薩左手執開敷華、當其台上画如意宝珠、右手作説法相」とある。

(15) 田村寛康「奈良時代東大寺盧舎那仏の両脇侍像について」（仏教芸術一二〇昭和五三年九月）

(16) 小野玄妙「東大寺盧舎那仏の右脇侍虚空蔵菩薩私考」（考古学雑誌六―四　大正一四年一二月、後『仏教の美術及び歴史』仏書研究会　大正五年所収）

(17) 猪川和子「岡寺如意輪観音像」（MUSEUM三二〇　昭和五二年一一月）

(18) 大正蔵経図像部一二巻

(19) また、八世紀当時の中国の事情を考えてみても、この頃には大和文華館像のような六臂像が存在し、四川の巴中磨崖南龕像（乾元二年・七五九頃）も六臂であり、二臂像は、敦煌画中に九世紀半ばを待って初めて登場し、その姿も石山寺像とは全く異なっていることは、石山寺像が二臂如意輪観音として作られたものではないことを推測させるものであろう。尚、中国の如意輪観音については、拙著『日本の美術三二一　如意輪観音像・馬頭観音像』（至文堂　平成四年五月予定）

で触れている。

(20) 続群書類従・釈家部、大日本仏教全書・寺誌叢書二、寧楽遺文・中

(21) 筒井英俊校訂『東大寺要録』（全国書房　昭和一九年、後国書刊行会より再版）

(22) 速水侑『観音信仰』（塙書房　昭和四五年）三一頁

(23) 佐和隆研「観世音菩薩の研究」（『密教美術論』便利堂　昭和三〇年）
長部和雄「漢訳如意輪法軌に関する研究」（印度学仏教学研究二九　昭和四一年一二月）などの論攷も、これを採用している。

(24) 例えば『大日本古文書』七―一八九頁など。

(25) 宝思惟訳は、義浄訳で説く陀羅尼の功徳が前半の内容で、後半は佩薬法及び護摩法のようなものから成る。

(26) 仏書解説大事典によれば、本経は宝思惟訳・菩提流志訳・実叉難陀訳の一部の異訳であるとし、開元録にこの四訳を同本異訳として「雖有広略據其梵本並訳未尽、義浄出者其法最略」とあるのを引用している。

(27) 構成は宝思惟訳に近く、菩提流志訳よりは簡略である。

(28) 『大日本古文書』一二―四一一頁

(29) 速水前掲書三八～四一頁

(30) 『大日本古文書』一三―一九・二〇・二一頁

(31) 注22の速水前掲書の他、堀池春峰「優婆塞貢進解と出家人試所」（日本歴史一一四　昭和三二年一二月）、井上薫『奈良朝仏教史の研究』（吉川弘文館　昭和四一年七月）、鬼頭清明「奈良時代民間写経についての二・三の問題」（南都仏教三一　昭和四八年一二月）など。

(32) 読経があるかないかは、経典内容の理解度の差にも係わるかも知れない。

(33) 堀池春峰「奈良時代仏教の密教的性格」（『西田先生頌寿記念日本古代史論叢』昭和三五年、後『南都仏教史の研究　下』所収・法蔵館　昭和五七年）

(34) 佐久間竜「慈訓について」（仏教史学六―四　昭和三二年一〇月、後『日本古代僧伝の研究』所収・吉川弘文館　昭和五八年）

(35) 『大日本古文書』一二―二九八～二九九頁

(36) 『大日本古文書』一三―一二二～一三二頁

(37) 佐久間竜「東大寺僧安寛について」（続日本紀研究五―一一　昭和三三年一一月、後『日本古代僧伝の研究』所収）

(38) 『大日本古文書』一三―四〇頁

(39) 堀池春峰「道鏡私考」（芸林八―五　昭和三二年一〇月、後『南都仏教史の研究　下』所収）

(40) 速水前掲書九〇頁にも同様な指摘がある。

(41) 注33、なお如意輪陀羅尼が病気治療に用いられた原因としては、『如意輪陀羅尼経』などに製薬法にちかいものを説き、それが「観世音如意輪含薬品一巻」として独立書写される事があった点も注意しておかねばならない。

(42) 『大日本古文書』四―九四頁

(43) この事に関して、広範囲な信仰形態を捉えることのできる『日本霊異記』に、「如意輪陀羅尼」が全く見えないことも注意できる。またこの点が、他の陀羅尼にはない特別なものとして期待されていた可能性がある。

(44) 横田健一『道鏡』（吉川弘文館　昭和三四年）

(45) 金子啓明『西大寺』（保育社　昭和六二年）

(46) この如意輪観音信仰も、実は（聖）観音に関するものであったことは、次節で明らかにする。故に、正確にはこの資財帳からも、道鏡の如意輪観音信仰は見いだせない。

(47) この点に関しては、三崎良周「奈良時代の密教における諸問題」（南都仏教二二　昭和四四年一月）が参考になる。氏はこの中で、宿曜秘法も当時伝わっていなかった事を述べられている。

(48) 大正蔵経二〇巻

(49) 大正蔵経五五。三崎良周「安然の諸阿闍梨真言密教部類惣録について」（印度学仏教学研究三二　昭和四三年三月）

(50) 大正蔵経二〇巻

(51) 大正蔵経図像部六巻

(52) 大正蔵経図像部四巻

(53) この傾向が進行した裏には、例えば義浄訳で「世尊比陀羅尼、有大神力猶如摩尼宝、亦如如意樹能満一切願」（他訳もほぼ同じ）と、陀羅尼の力が如意宝珠にたとえられていることなどもあろう。

(54) 壬生台舜『金光明経』（大蔵出版　昭和六二年）

(55) 『寧楽遺文』下巻

(56) 『大日本仏教全書』遊法傳叢書一

(57) 八大菩薩にいく種類かのあったことは、堀一郎「寧楽高僧伝」（『堀一郎著作集』第三巻所収・未来社　昭和五三年）の注にみえる。また、『覚禅抄』（大正蔵経図像部四―四七二b・四七六b）にも記されている。

(58) 注19参照

(59) 大正蔵経二〇―二七一a・二八八a

(60) 注7の福山論文に詳しい記述がある。

(61) 田中豊蔵「東大寺法華堂の諸仏」(思想四三　大正四年五月、後『日本美術の研究』二玄社　昭和三五年所収)

(62) 浅井和春「法華堂本尊不空羂索観音像の成立」(日本美術全集四『東大寺と平城京』講談社　平成二年)

(63) 大智度論五九には、如意宝珠についていくつかの説を述べた中で、有人言はくとして、諸の過去久遠の仏の舎利なり、法既に滅尽せば、舎利変じてこの珠と成りて以て衆生を益す、とある(望月仏教大辞典、如意宝珠の項参照)。

(64) その姿として、韓国金銅仏中にみえる、宝珠をつまんだ様な姿の観音像(扶餘窺巌面出土・国立中央博物館)や、大英博にある左手掌に宝珠を載せて坐る観音像(スタイン将来・北宋太平興国八〈九八三〉年銘・右手屈臂、左手を垂下する左足上におく)なども参考になるかも知れない。そして、ここで重要な問題として残ることは、法隆寺夢殿救世観音に代表される宝珠捧持形式と呼ばれる菩薩像が、上記の諸像と同様な意識で作られたものではなかったかと予測されて來ることである。

(65) 堀池春峰「華厳経講説より見た良弁と審祥」(南都仏教三一　昭和四八年一二月、後『南都仏教の研究　上』所収)

(66) 林英樹訳『三国遺事』(三一書房　昭和五〇年)

(67) 本稿は、良弁以降の石山寺像の意味を考えたが、実は正倉院文書から判明する塑像以前の像(つまり天平宝字五年以前の石山寺本尊)の事も考慮しなければならない。しかし、この像と天平宝字五年より作り始めた像との関係については、史料に全く見えず触れることが出来なかった。

本稿を成すにあたり、東京国立文化財研究所西川杏太郎所長・同名誉研究員猪川和子氏・同美術部情報資料部諸氏・東京国立博物館副島弘道氏に有益な御助言を賜った。記して感謝申し上げます。